

献 辞

チエリー・カザボン教授は1999年9月に本学に着任され、2010年3月31日に定年退職されました。最後のこの10年は、楽園であったとご本人も述べています。名誉教授の称号も授与されました。私は、以下で2点(人柄と業績)にしぼって先生について語り、率直に述べ、かつ人びとに良い思い出を持っていただけるように努めます。

先生は、まずフランス人らしい明晰さを身につけておられました。答えの出しにくい問題に直面したとき、先ず疑わしいものは排除する。デカルトのごとく、「明晰かつ判明」に論を進められる点は学べました。名案と思えても失敗もあろう、しかしその時はやむを得ないとする姿勢も潔いものでした。特に、海外研修の立案、実施に際し、またフランス人の人事に関して、幾度となく良い助言を頂きました。

かつて、リセの先生からは「書類の整理」の大切さを学ばれたそうです。それを文字通り実施し、加齢からくる物忘れをカバーされていたふしがあります。人間の能力などそんなに差はない(?!)。探し物をして時間を費やし、あげくの果てには何を探していたのかもわからなくなる私にとって、良い教訓を残されました。

研究上の関心は、「熱帯地方の経済」だったようです。事実、セネガルからはじまり、マダガスカル、ニュー・カレドニアについて、執拗に調査と探索をしておられます。ニース近辺の鷺ノ巣村エズで、熱帯植物を見学中にサボテンに文字通り(食いつかれた)時には助けてもらい、蘊蓄を傾けた講義が聴けたのを私は思い出します。

研究の最後は、ピエール・ロティの研究、特に『お菊さん』の分析にいたります。明治18年に長崎に来てその後も何度か日本を訪れたこのフランス海軍士官の本に興味を持たれるのは至極当然です。しかし、100年前のこの作家は決して日本を愛していなかった、現実を見ていなかったこと

を、指摘されています。

FLE（外国語としてのフランス語）の分野でも興味ある小論（部分冠詞）があります。caféはいつでもduではなく、leもunもあることをフランス製の教科書の弱点を突きつつ指摘してくれました。学生にも勧められる論考です。カメラの名手の先生をこうした短文で、ピントのずれなく捉えられたか不安ですが、すでに紙幅の許す限界に来てしまいました。

2010年3月31日 フランス語学科長 熊沢一衛